

# 現職研究レポート

## その四 M幼稚園の場合

太田留美

現職研究レポートも第四回目に入った。私達はこれまで、幼稚園を訪問するたびに、幼稚園にはそれぞれ、その園固有の園文化を持っているという事を感じさせられてきた。

今回、レポートするM幼稚園も、園文化といった点において、極めてユニークな特色を持った幼稚園である。

M幼稚園の公開観察日は、昭和五十三年一月二十三日であった。冬の最中ではあったが園庭の日溜りや、日当りの良い部屋のあちこちで、のんびりと遊んでいる子ども達の姿が見られた。

園庭は広く、ホールや保育室もゆったりしており、八十六人の子ども達が遊ぶには、十分、恵まれた環境にあると思われる。が、それにもまして、私達の目を引いたのは、幼稚園の中にある

美しい物の数々である。

手作りのぬいぐるみ人形や玩具。ホールの片隅に置かれた本物のはた織り機や手染めの糸。窓際を飾る観葉植物。壁にかけられた大小の油絵。磨きあげられた廊下、庭に建てられたメルヘン調の子どもの家等々。

これらのものが、とりも直さず、M幼稚園の園風を作り上げているかのようである。

M幼稚園は、他の幼稚園のように、先生方が、朝、園にやって来て、夕方、帰って行くというのではなく、園を開設されたO先生と家族の生活がそこにあって、子ども達を迎え入れるという形である。

また、O先生姉妹は、油絵や織物など芸術的なものに造詣が深く、そのような、美しいものを追求していこうとするO家の家風といったものが、保育の中に自然に入り込んでいようである。さて、このような特色のある園の中で、子ども達はどのように遊んでいるのであろうか。

この日、観察者たちは、同じ遊びが淡々と長く続くこと、しかも、幼稚園では当り前とも思えるトラブルがほとんどなく、穏やかに続いている事を不思議に思った。

この穏やかさはどこから来るのか。このトラブルのなさは何なのか。素晴らしい事なのか。物足りない事なのか。これらの疑問を抱え、長く続いている活動に焦点をあてながら、M幼稚園の保育の特色を探ってみることになった。

長く続いている遊びとして、三歳児、年中児、年長児の三つの事例をあげてみよう。

### 事例1 三歳児の遊び

一月十六日：Nが昨日から欲しかった自動車をO先生にもらい、嬉しそうに持っている。「積み木で道路を作ってみたら」と言うのと、すぐに大積み木を運び、部屋の中央に長い道路の

ように並べた。そこへKが加わる。

二人で木の車を沢山並べて遊ぶ。片付けの時間になり、部屋の隅に積み木と車を片付けておいたが、M子がそれを見て、トンネルのように並べ替えて帰った。

一月十七日：M子は登園して来るとすぐに「あったあった」と言つて、昨日、作つて帰つたトンネルに車を走らせ「一号車！ 一号車！」、「火事ですか」などと言いながら遊んでいた。そこへ、KとOが入つて来て、いつの間にか「カレー屋さん」になり、「先生、カレー食べに来て」と誘いに来る。何もないのだが、作るまねをして出してくれる。

しばらくすると、「かるた」をしていたR子が「ここは動物園でしょう」と言つて入つて来る。「ちがうもん」と反対していたが、話がまとまり、皆で、ホールからぬいぐるみの動物を一個ずつ運んできて、積み木のすき間にどんどん入れていく。

このぬいぐるみ遊びが終わらないうちに、「きつぷ」と言いながら、紙を小さく切つて、切符切りが始まった。

ここで、片付けの時間になったが、自分達の場所である印なのか、紙に字のようなものを書き、積み木やボードにベタベタと貼りつけていた。

一月十八日：Mは登園して来るとすぐに、「N君、やろうよ」と誘って、「カレー屋」を始める。そこにKとA子が加わる。そのうちM子が抜ける。そこで、積み木の場所の雰囲気が変わり、「ここは警察だ」とNが言い、A子は「お店屋さんなのよ」と言っていて遊んでいる。同じ場所で、それぞれ別の遊びが続いていた。

(Ki先生の記録より)

三歳児の遊びは、同じ積み木を並べた場所で、自動車遊びがカレー屋さんになり、動物園になり、切符作りになるというように、別々の遊びが重なって、一つの流れとなって活動が続いている。また、一人一人が、まるつきり別の事をやっっているが、同じ場を共有していることで、つながっている場合もある。まさに、混沌とした始源の状態で、ばらばらと遊びが起っては消えていく様子が、この記録からうかがえる。

## 事例2 ブロック遊び（年中児）

入園したての四月、遊びがなかなか見つけれない不安定

な状態の中で、多くの男児が求めた遊びがブロックだった。段々と月日を経て行くうちに、他の遊びに興味が移って行き、一学期の終り頃まで残ったのが、現在でもブロック遊びを続けているGとTだった。二学期になって、他の物も使って欲しいと思ひ、箱制作に誘って見たが、ほとんど見向きもしなかった。そのうち、転園してきたYとThも加わり、ますます盛んになってきた。

一月二十六日：Tは登園してすぐにブロックの所へ行き、自分の作ったブロックに、人形が乗っていないのを見て、引き出しの中から人形を捜し始めた。しばらくして、猫の人形を取り上げ、自分のブロックの上に乗せると、他の遊びを始めた。

一月二十七日：Thは登園すると、まず、ブロックの所へ行き、自分のものを確認すると、Gと一緒に映画ごっこをして遊び始めた。

この時、TやThが、必ず、登園するとすぐに自分のブロックを確認することから、このブロックが無かったらどうなるのかと思ひ、引き出しに片付けておいた。

一月二十九日：Tは登園してすぐに、ブロックの所へやって来た。ブロックと人形が失くなっているのに気付くと、引き

出しを捜し始め、自分の猫の人形を見つけ、他の子ども達と遊び始めた。その後、わずかな時間で、急いでブロックで人形をのせる台を作って、棚の上にのせておいた。

Thも、同じ様に、人形とブロックが失いのに気付くと、やはり引き出しを捜して、自分のベンギンの人形を見つけると、ブロックを探し始めた。やっと見つけたブロックが壊れていたで、二つの座席のあるものに、改良して作り直した。ブロックに人形をのせて、しばらく仲間と遊んで、いたが、他の遊びに移った。その遊びの間中、そばにブロックと人形を置いていた。そして、片付けの時、棚の上にのせておいた。

(Ko先生の記録より)

このブロック遊びは、えんえんと一年近く続いている遊びであるが、この記録に見る時期においては、ブロックで遊ぶというより、自分のブロックと人形を確認して、それから他の遊びを始めている。そして、遊びが終った時、ブロックと人形を棚の上にのせておく、彼らがブロックで遊び始めた一学期の頃から、「先生、これとっておいて」という言葉があり、それらのブロックは次の

日も次の日も、大切にのせて置かれたということである。その事は、また、ブロックの場所が、彼らの場所として、暗黙のうちに認められる事になり、彼らの安住の場になったと思われる。

一年以上もブロック遊びが続いてきたのは、その日、遊んだものが、次の日もそのままのて置かれたという状況が可能であったことによるのではあるまいか。

### 事例3 お花やさん(年長児)

十月中旬、秋になり、庭にいろいろな植物が豊かにあつたことがきっかけとなり、H子、M子、N子の「お花やさん」が始まる。

十一月初旬、近くのお寺に散歩に行った時、「お花やさんで使うの」と、枯れた大きな葉っぱを沢山持ち帰る。この木の葉のお皿が、二学期の間中、このグループの遊具となった。ホールに、積み木やマットを使ってお店を作る。長イスの上で、木の葉にのせた草花や木の実を色とりよく並べ、「お客さんに来て」と皆に呼びかける。

積み木のコーナーを、男の子達に取られたため、長イスだ

け持つて、ままごとコーナーへ移る。

クリスマスの頃、製作したり、劇などで忙しい時も、時間を見つけては、ままごとコーナーに集まり、「花やさん」を続けていた。

一月十日：始業式の日、H子、M子、N子の三人は、ままごとコーナーへ飛んでいき、「花やさん」の店開きをする。

一月十二日：庭のささんかの花びらを集める。

一月十三日：はまぐりやあわびの殻に絵を描いていたグループから、貝をもらって、その中に花びらを入れ、張り切って売り始める。

一月十六日：二学期からずっと、ままごとコーナーを占領しているため、他の子ども達が遊べない事も気になって「お花やさん、外の子どもの家に引越しませんか」と声をかける。「みんなからよく見えるし、お客さんが沢山来てくれるかもしれないよ」と言うと、「そうする」と言っ、引越しが始まる。ままごとコーナーの長イスの上に、小さな紙切れがあり、「おはなやさんは、こどものおうちにひっこしました。そとにきてください」と書いてあった。

次の日、三人は、外の子どもの家に飛んで行ったが、「ストープがあればいいなあ」と言っ、すぐに戻って来た。

その日から、ままごとコーナーに行っても、「花やさん」は始まらず、人形の洋服づくりに夢中になっていた。

人形の洋服づくり、ダンボールの中に入って遊ぶ、色水で遊ぶなどの活動が展開されたが、あまり深まった遊びはなかった。

一月二十四日：ドッジボールに、年長のほとんどが参加して遊んだ。片付けの時、ままごとコーナーで、ことり組（三歳児）の子ども達が遊んでいるのを見つけ、H子は、自分達の「お花やさん」の道具をかき回したと、ことり組の先生に抗議に行った。

（O先生の記録より）

これは、年長児の半年以上続いている「花やさん」の記録である。

H子達は、「花やさん」をずっと続けるにあたり、何度かの引越しを余儀なくされているが、たいした抵抗も示さず、すんなりと移っていく。また、園でドッジボールのような遊びが流行ると、その遊びに加わり、「花やさん」は休業する。彼女達は、極めて自然に遊びを続けているようである。消えたかに見えた「花

やさん”が、本人達の中には残っていて、再び始まる事もあり得るわけである。

これまで見てきたように、M幼稚園の保育は、一日の中で、くり返し続いていく遊びがあり、また、三年間の保育の中でも、何度か出たり入ったりして続いていく遊びがある。そのような、ゆったりした、穏やかな保育がM幼稚園の特色である。このような特色がどのようなところからくるのか、話し合いの中で出された意見・感想をここに掲げてみよう。

今まで訪問してきた幼稚園でも、遊びが長く続いている園はあったが、M幼稚園はどこか違う。同じ遊びが続くにしても、わーっと乱れることがない。それはそこに住んでいる人の匂いがあるからではないか。二人の先生以外は同じ家族として生活しているので、家庭の匂いが強く、それが無意識のうちに、子どもに感じられるのか、何か統制されたものになるのか、それが安心感につながるのかしらと思った。

(H幼稚園 N先生)

以前、O先生は「どうせやるなら、私の好きな事だけをやっている幼稚園をつくりたい。」と話された。自分の生き方を素直に保育の中に位置づけて、そこへ子ども達が入り込んでいる。つま

り、幼稚園のいろいろな教育的な目標や枠組に入れるより、O家に「ごめん下さい」と子どもが入り込んで、保育者もそこで自然に生活を展開しながら、子どもに触れている。そこで、出き上ったのが幼稚園の和やかさ、のんびりさにつながっているのではないかと思う。

(H先生)

生活も保育の場もみんな、子どもと一緒にやっていっているという事は、他の幼稚園と違うところである。また、やろうと思っ  
てできることではなく、なかなかやれない事であろう。こういう  
保育はユニークでもあるし、本来の姿であるかもしれないと思っ  
た。

(T先生)

現職研究のゼミを終えて、M幼稚園のO先生は、「今まで無意識にやって来た事が、他の幼稚園の先生方の観察を通して、いろいろな角度からの感想を聴くことで、逆に自分の園の特色を意識化させられた」と言われた。

そういう事を踏まえて、また新しい家風づくりに励み、独自の園文化を作って下さることでしよう。

(宇部短期大学)